報　　告　　書

<table>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">平成25年11月25日（月）午後７時～８時</td></tr>
<tr><td>開催場所</td><td colspan="2">気仙中学校</td></tr>
<tr><td rowspan="5">出席議員</td><td colspan="2">挨　　拶　　及川修一班長（教育民生常任委員会委員長）</td></tr>
<tr><td>司会進行</td><td>大坪涼子</td></tr>
<tr><td>報　告　者</td><td>及川修一</td></tr>
<tr><td>記　録　者</td><td>鵜浦昌也</td></tr>
<tr><td>議　　員</td><td>大坂俊、松田信之、清水幸男</td></tr>
<tr><td>参加人数</td><td colspan="2">市民２人、教諭２人</td></tr>
<tr><td>懇談テーマ</td><td colspan="2">震災後の学校施設の整備状況について</td></tr>
<tr><td>主な要望
・提言等</td><td colspan="2">1. 以前の気仙中校舎は震災で全壊状態となった。市内の小中学校は次の年のスタートが４月２０日だった。気仙中は旧矢作中の校舎を使って再開することになったが、生徒の家庭は１４～１５箇所の仮設住宅に散らばった。そこで、スクールバスで１時間ほどかけて登校する案を提示した。当時は「今住んでいる場所の近くの学校に登校しても構わない」ということにした。すると１０人程度が気仙中以外の学校に一時転出したが、結局は「これまで一緒に勉強してきた生徒のいる気仙中に通いたい」と、一学期中にすべての生徒が戻った。通学には大変だが、生徒たちは元気で明るい学校生活を送っている。昨年は７割５分、今年は６割の生徒がいまだ仮設住宅から通っている。教育長から「震災により生徒の学力を低下させるな」との指導があり、学校では休み時間を短くするなどの工夫をしながら２５分という時間を確保し、教室で宿題などの家庭学習をさせている。家庭に帰ったら勉強するスペースがないだけに、学校での生活を充実させるよう心掛けている。
2. ６割の生徒が仮設暮らしということで、いくら立派な防潮堤を造っても、街を形成しても、そこに人がいないと無用の長物になってしまう。本市の人口は２万人にまで減少した。小中学生は大変な震災を経験しながらも頑張っている。防潮堤も街も必要だが、子どもたちの生活が１日も早く普通の生活に戻るよう予算を使ってほしい。復興が長引き、若い世代が市外へ出ていかないような施策をお願いしたい。復興が遅れ、自分の家がどこになるのか分からないと不安になり、仕事が選べる市外へ出て行ってしまう。早く定住の場を示してほしい。地震や津波の警報、注意報が発表されれば、学校から生徒を帰さないとい</td></tr>
</table>

	う考えに賛成だが、学校に宿泊するとなると毛布が１枚しかない。例え床暖房があっても寒いでの、もう１枚毛布を配布してほしい。スクールバスの運転手は、登下校の運転中に警報が出た場合など、安全な場所を把握しているのか心配。津波の被害を受ける場所に向かわないよう指導をお願いしたい。子どもたちは市の宝であり、未来に希望が持てる施策をお願いしたい。放課後に小学生の子どもを安心して預けられる場所を設けてほしい。 3. 震災直後、避難した住宅近くの大きな学校に通った子が、気仙中で当たり前だったことが当たり前でなかったことからどうしても馴染めず、気仙中に戻ってきたというケースがあった。ＢＲＴバスの運行開始間もないころ、乗車しようと待っていた生徒が運転手から「ここは停留所でない」と言われ、乗車拒否されたことがあった。運転手の教育についてもしっかりしてほしい。子どもたちの家庭学習に関し、各地に勉強を教えてくれるボランティアなどが配置されたが、長部地区や竹駒の滝の里仮設には配置されなかったのでお願いしたい。仮設で暮らしている親は、これから住宅を建てなければならないし、子どもの進学のことも考えなければならない。そうなると負担が大きいだけに、奨学金を拡充してほしい。ある中学生は、高田高校か大船渡高校に進学して大学進学を目指そうとしていたが、家庭の事情を考えて大船渡東高校に行って就職しようと切り替えている子もいる。 4. 市教委から生徒たち一人一人に寝袋の支援をいただいたほか、学校では義援金でダルマストーブを購入して有事に備えている。スクールバスについて、片道１時間かけて通っていることは子どもたちに大きな負担となっている。土日曜日はクラブ活動のため親が学校まで送迎しており、親の負担となっている。部活動バスは屋外で行う野球部とソフトテニス部は使用できるが、体育館が使用できるようになった事からバスケ部やバレー部は使用できない。クラブによっては親が練習試合の送迎をしなければならなくなっている。学校施設の状況は戻りつつあるが、保護者の仕事や家庭の状況はそれほど変わっていないので、ぜひ部活動バスの継続をお願いしたい。 5. 震災直後、スクールバスは平日の運行だけで、土日の運行については話がなくスタートしたのだと思う。その後、保護者から「土日曜日も運行を」との話が出て、市教委が了承した。しかし、仮設住宅に住んでいる子どもたちにとって、土日曜日に学校へ来るよりも、直接練習試合が行われる学校に直接行くケースが多かった。実際にスクールバスを計画したら土日曜日に乗車するのは３人ほどで、中止した経緯がある。やはり、住んでいる場所と学校が離れていることに大きな問題があると思う。

	6. 実際に長部から学校まで１５キロの距離にある。土日曜日にバスを出してもらえばあり難いが、現在は保護者同士、交代でクラブ活動の子どもたちを送迎している。 7. ＢＲＴバスは矢作小のところが発着か。今後、二又の方まで延長されないか。もっと運行経路を考えてほしい。ＪＲの線路があった場所に走らせるというのはナンセンス。バスなのに駅があった場所にしか止まらないといのはおかしい。ＢＲＴを走らせる経費で県交通を増便させ、バスを小型化して小回り良く走らせてほしい。あれだけ立派な駅舎は必要ない。大船渡高校の保護者は送迎で苦労している。 8. 生徒の中には家族を亡くした子もおり、ふだんは明るく振る舞っているが、家に帰ってから不安になる子もいると思う。そのような生徒でも、学校に来て友だちと会うことで元気になり、救われていることもあるのではないか。生徒たちは夏休みも冬休みも楽しく学校に来ている。 9. 市教委が気仙中、第一中、横田中の統合についてどのような考えなのか情報はないか。昨年２月に３校が集まって協議したが、それ以降話がない。保護者の中には「来年統合されるのでは」との心配の声があがっている。 10. 統廃合について、これまでも保護者の間で話し合ってきた。結論は「もう少し先にしてほしい」というもので、意見としては「気仙町が好きで、ほかに行きたくない」というのが多かった。今後も話し合いが必要と思う。
所　　感	【及川修一】 東中学校と同様、議会報告会の周知方法の問題も感じたが、住む場所と学ぶ場所が遠隔地にあるため、報告会の会場決定の配慮が無かったと反省させられた。 気仙中学校は特に、地理的ハンデが大きく、スクールバス、スポーツ支援バスの重要性は特別なものがあることを感じてきた。 【大坪涼子】 現在使用している旧矢作中学校まで登校するのに１時間かかっている生徒もいると聞いた。学習の面では、仮設住宅での家庭学習を援助するため、学校で毎日２５分間の学習時間を確保するなど学校現場での苦労などもについて聞いた。こうした学校への今後の支援も課題と感じた。 【鵜浦昌也】 生徒たちは自宅と学校を１時間ほどかけてスクールバス通学してい

	る。距離が遠いことで、生徒をはじめ保護者にも大きな負担となっていることを痛感した。 【大坂　俊】 　他校でもそうであったが、教師、父兄が一丸となって大変な状況の中での教育環境の整備に取り組み、高い経験値を得、施設整備のみならず、すべての学校教育環境の整備向上を目指している様子を実感でき、議会としての活動の責任を感じさせられる議会報告会であった。 【松田信之】 　生徒の多くの家庭が仮設住宅であり、通学に多くの時間をかけている。支援バスの継続と更なる拡充等の課題があった。また、報告会の周知に課題があった。 【清水幸男】 　震災により生活圏が分断され、旧矢作中学校を間借りしての学校生活、子どもによっては通学に１時間も要する等、その厳しさを感じたところである。また、この様な状況の中で、学校教育の充実を図ろうとしている学校関係者の努力も察するところである。 　今後は、震災復興の状況を踏まえつつ、将来を担う子供たちの教育環境のあり方について、慎重な協議が求められる。

陸前高田市議会　議会広聴広報特別委員会
　広聴小委員会小委員長　松田　信之　殿

平成２５年１２月２日

陸前高田市議会議会報告会開催要綱第１０条第１項の規定により提出します。

平成２５年度議会報告会２班（教民班）
班　長　　及　川　　修　一　㊞